
-animalIZE-

ちゅんき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- animalIZE -

【Nコード】

N5631Y

【作者名】

ちゅんき

【あらすじ】

動物と会話できる事以外はフツの高校生だった。あの時までは

.....

・アニメライズ・（前書き）

はじまして。何故か夢に見た内容を元に妄想を膨らませた結果がこれですよ……

どうかお付き合いおねがいしますm（ ）mペコリ

・アニマライズ・

俺は、物心ついたときから動物の言葉がわかった。

動物っていつても今まで野良犬や野良猫、あとはカラスとかしか話をすることがないから全ての動物がかはわからないが。

……少し唐突すぎただろうか。

もう少し俺の事を紹介する前に家族の事を紹介したい。

俺んちは親父、お袋、姉貴、兄貴、そして俺の五人家族。

そして俺以外全員動物嫌いか動物アレルギー持ちとゆう驚異な家庭だ。

そのせいか家にペットはいない。

さらに動物園やら水族館やらは学校の遠足でしかいったことない。

そんな家庭で育った俺がどうしてこんな特殊能力を授かったかはわからないが、ひとまずわかってしまうものはしょうがない。

とまあそんな能力以外フツーの高校生なわけだが、あとは……

「こなぎとつやあああああ……！！！！！！」

誰かに叫ばれ、目が醒める。

「……………ほあ？」

クラス中の視線が俺に集まってる。

「まったくお前は……………眠いなら家で寝てろ」

担任のクソチビ（ ）に言われ、今どこにいるのか思い出す。

ここは俺が通う清和高等学校。ごくフツウの高校である。

そして今いる場所が二年四組。俺は窓側の一番後ろという学生が1番憧れる席に座っているのだ。

『まったく昼寝とは……だらしないわね』

そんなベストポジションに座る俺に声をかけるのは外の木の影で昼寝をしているネコ。

こいつはナシヤ、俺が小さい頃はじめて会話した野良猫だ。

それ以来、ずっと一緒にいる……いわゆるパートナー的な奴だ。

てかいつも寝てるお前にいわれたくねーよ。

どっちみち授業中だし、会話はできないのでシカトして俺は再び睡魔の誘うままに眠りについた。

編集方法がよくわからないよ

く放課後く

『…のバカ……………くお……………』

「ん……………」

頭がぼーっとする。

体が痛い。ここはどこだ？

『まったく……………起きなさい冬哉』

「んあ？ああ……………ナシヤか……………」

『ああ……………じゃないわよもう！外見なさいよ』

言われた通り外を見る。

……成程真っ暗だ。

「しかしよくねたぁ……」

背筋を伸ばす俺をよそにナシヤは母親のごとく説教をしてた。

もちろん何一つ頭に入ってない。

てゆうかはたから見たら猫がにゃーにゃー言ってるようにしかきこえないんだがな。

「お、ようやく起きたか小風。もう下校時間すぎてんぞ」

「ういーっす」

見回りの先生に急かされ帰り支度を始める。

「ん？またその猫か…懐かれたか？」

先生がナシヤを指して言う。

最近俺のそばにいるのをよく見ているのだろう。

「まあ……それなりに、」

教室に猫がいても騒ぎにならないくらいには緩いんだな、この高校…

「ひとまずはよ帰れよ、」

「ういーっす」

カバンをもち、教室を立ち去る先生とは逆の方へ歩きだす。

『あら？今日は正門から帰らないの？』

「気分だよ」

実は正門を通って帰るより裏門を通ってったほうが近いのだ。
普段は裏門方面は昼間でも真っ暗だからあまり通りたいくないのだが
寝すぎてしまったので仕方ないだろう。

なんせ俺ん家の門限は働いてる奴は12時、それ以外は7時までと意外と厳しい。バイトはしてないので俺の場合は7時までには帰らないとメシ抜きなのだ。

食べ盛りの男子高校生にメシ抜きは正直、結構キツイ。

ナシヤがまだぐちぐち文句を言っていたがいつも通り総シカトをしながら俺は学校を出た。

|| || (| .)

「うっわー……やっぱ不気味だなこの道は……」

裏門を通り抜け、学校裏の薄暗い林の中をひたすら歩く。

『誰のせいよまったく……はやく行くわよ』

俺の数歩前をナシヤが歩く。

たまにこっちを振り返ってくる辺り成程こいつも怖いのか……

「あー！！！！旦那！！！！久しぶりじゃないっすか！！！！」

「!!!」

!!!

急にでかい声が林に響き渡りびっくりする。

「なんだカー助かよ……驚かすなよ……」

さっきの声の正体はこいつ、名前はカー助。名前の通りカラスだ。

ちなみに名付け親は俺だ。

なかなかダサイ名前だろう、俺もそう思う。

『旦那最近ここら辺通らないから久しぶりっすね!!』

「あんまりここら辺はすぎじゃねーの」

カー助はここら辺一帯のカラス共の親玉らしく、大体はこの林の中で暮らしている。

そのせいか俺がここを通った時にしか現れない。

言われてみればここも久しぶりに通った気がするな……

「お前がいることすっかり忘れてたよ」

『えっ！旦那ひどっ！！』

『五月蠅いわよバカラス！！！少し黙りなさい！！！！』

と、ナシャがカー助を怒鳴り散らす。

本来、違う動物とはは言葉を交わせないし意志の疎通もできない。
人間が動物の言葉がわからないのと一緒にだ。

ただ、俺と関わった動物と別の動物だったら言葉がわかるらしい。
前にナシャがああだこうだ教えてくれたが忘れた。

『ああ？また襲われたいか？』

『はいはい、ストップストップ』

ナシャがシャーっと警戒している。

そもそも俺とカー助の出会いにはカー助がナシャを襲っている所を俺
が見つけ、カー助をシバいたのがはじまりだからな。

当たり前だがこいつらは根っから仲が悪い。

「じゃあな、忘れてなければまたくるよ」

カー助に軽く手を振り、俺らは林を走る。

タイムリミットはあと10分。

走ればなんとか間に合うはずだ。
頼む、間に合え！

確か今晚は好物のカレーなんだ…！！

はたして今日は何カレーなのか

「たっ……………ただいまぁ……………」

カー助と別れてから全力疾走。

俺の体力は既に限界だ……

「遅い！！まあた学校で寝てたんだろ！！」

鬼のような喧騒で出迎えたのは姉、しゅうか春夏。

1番上である姉はしっかり者すぎるくらいしっかり者で姉がいればなにもしなくても事が済む。

現在大学院生。

そしてひどい動物アレルギー持ちだ。もう同情するレベルで。

「も…門限は守ってるだろうが……………」

「……………まあいいわ、はやく入りなさい」

玄関で引き止めてたのは誰だよ……
靴を脱ぎリビングへと入る。

「ただいまあ」

「遅かったわね」

「まあな、」

ひとまずバッグを放り投げ、椅子に座る。

ここで一つ、また家族の説明をしよう。

俺の正面に座っているのは母、花子。

大の動物嫌いで母の前には人間以外現れないと近所で噂の人である。

以前、友達と電話をしたときに友達の家で飼ってる犬が受話器越しに吠えたとき「*****!!!!!!」と叫んで発狂したのは俺のいいトラウマだ。

どんだけ地獄耳だよ……

そして俺の隣が兄、秋羅。（あきら）

わが家の二番目で母に次ぐ動物嫌い。

幼い時に犬に噛まれてから嫌いらしいがあの時は兄貴がつまずいて犬に激突したのがいけないんだ。
犬だって痛がってたし。

そして今はいないがお誕生日席に座るのが父、稔。（みのもる）

姉のアレルギー持ちの全ての元凶であり大黒柱。

ちなみに今日は飲み会らしい。

…さて、話に戻ろうか。

「いただきまー……」

電話音が鳴り響く。

飯を食い始めようとするところだ…まったく。

「いいよ俺でるわ」

電話から一番近い俺が受話器を持ち上げる。

「はいもしもし？」

………

.....無言。

「?もしもし?」

.....無言。

なんだよはやくしてくれ、今日は好物のカツカレーなんだよ。

「イタズラなら切るぞー?」

【.....あなたが冬哉くん?】

女の人の声、誰だ?

「そうですね……誰ですか？」

【あなたが本当に冬哉くんだったらこの状況、わかるかしら？】

「は？なにいつ……」

そこで俺の思考が停止した。

受話器越しに聞こえる小さな声。

【タスケテ……】

とても小さくて、今にも消えてしまいそうな程の、か細い声。

【オネガイ……タスケテ……】

俺はこの声を知っている。

いつも通う廃れた神社に住んでいる、か弱い小さな命。

【オニイチャン……トーヤお兄ちゃん!!】

後ろで発狂する母。

つまりこの声は……

【この子を殺されなければ神社にきなさい。1時間以内に来なければこの子を殺すわ。】

受話器をたたき付けて玄関へと走り出す。

「お…おい！待てよ冬哉!!」

兄貴が叫んでるが無視。

今はそれどころじゃないんだよ!!

「待てって!!!!」

玄関で兄貴に追いつかれ、腕を捕まれる。

「放せ……ッ!!」

ガツツと顔を殴られる。

口の中を切ったか血がでてきた。

「……てえ……」

「どこに行くんだよ」

「兄貴には関係ないだろ……」

「関係ある」

「ないっていつてんだろ……」

「ある、どこに行くかくらい言えよ」

「なんも知らねえお前等には関係ねえんだよ!!!!」

玄関を飛び出し、暗い夜道を走り抜ける。

神社のことは、俺と近所の野良犬、野良猫しか知らない。人間で知っているのは俺くらいだ。ちゃんと念のために保健所の奴らが来たときの逃げパターンも教えてある。

なのになんで、何が起きてるって言うんだよ…

まばらに立つ街灯の明かりを頼りに神社へ向かう。

時間はまだある。なにもしなければいいが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5631y/>

-animalIZE-

2011年11月19日22時56分発行